

# 優秀賞

## 瞳レンズ

### 高松市立古高松中学校一年 高水 由美

「今、瞳に映っているものは。」と訊かれたら、君は、何と答えるのだろうか。

そうだな、僕なら、爽やかな晴天の隙間から、細い雨粒が、僕の足元へまっすぐに落ちてくる光景、と答えるだろう。そして僕は、こんな風に美しい瞬間は、必ずカメラに収めるべきだと思ふ。けれどそのカメラは、十駅と徒歩十分向こうの僕の家にある。困ったな、忘れたくないのに。この空がくれた感動を、一生忘れたくないのに。でも、しようがない。僕は、一呼吸おくと、悔しさをそこに残して、目的地へと足を進めた。

今日の目的地、それは、学級の集まりがある、ちよっとした街中のカフェである。学級の集まり、というのは、

うちの中学の一年七組の誰かが計画した、「学級文化祭」の準備のことだ。ただ、運悪く前回の打ち合わせに風邪をひいて参加できなかった僕は、どの出し物に出るかよく考える暇もなく、急かされて「僕らの町写真館」を選んだ。あまりこのクラスになじめていない僕は、空気良く準備ができるように、参加するメンバーを見て慎重に出し物を選びたかったのだが、そうはいかないらしい。つまり、とても不安なんだ。平和なメンバーと、自分の目指す最高の写真を撮れるだろうか。カフェにつくと、恐る恐る自分の出し物のテーブルに向かう。するとそこにいたのは。

「あ。来た来た。よし、そろったね。それじゃ、始めよう。」

「えっと、板花さんだけ…なんだね。」  
「そうだよ。私はどうしてもこれがやりたかったんだけど、だれも参加してくれなくて。塩島君が参加してくれてよかった。」

板花銀。小学校から知り合いの、かといって特には仲良くもない、クラスメイトの女子。

「写真、好きだったんだ。」

「うん。私、まわりにある幸せをカメラに収めるのが好きなの。」

その気持ち、少し分かるな。僕が写真を好きなのは、いつもは感じられない幸せを見つけたとき、それを写真に残して、ずっと忘れないでいられるから。辛いとき、勇気をくれたその花々を、いつでも愛でられる。疲れたとき、元気をくれたその晴れ空を、どこでも眺められる。だから僕は、いつでもどこでも、カメラを手に持つ。まあ、今日だけは、忘れたんだけども。

「僕も、幸せを見つけたときに写真を撮るんだ。」

「分かるよ。日常を撮っておくことで、どんなものも幸せに感じられるもんね。」

なんだろう。言葉にすれば、僕と同じような気持ちで写真を撮っている風にも感じるけれど、きつと何かが違う。この人は、僕とは違うところを見ているんだ。そんな気がする。

その後僕たちは、いろんなことを話して、また明日、写真を撮りに集まることを決めた。

八月二日。町の公園の、紅葉の木の下にて。

「今はまだ青紅葉だけど、これから少しずつ紅く染まっていくのが、楽しみなんだ。」

八月九日。少し遅い時間に集まって、二人で自転車をとめて、空をただカメラに収めて。

「桔梗色と、東雲色と、縹色と、梔子色と。全部とけて、それぞれ一瞬で変わって、またまっさらな明日を迎える。きつと空は、そうやってできてる。」

八月十五日。地域の花火大会。ここでは、たくさんの写真を撮った。本当

に本当に。花火、かき氷、綿菓子、金魚、ヨーヨー、浴衣。浴衣を撮った時、初めて人を撮ったことに気づいた。

「失礼だけど、塩島君らしくない。塩島君の人の写真見たの初めてだし、不思議な感じ。私ね、町の写真だから、最近人の写真撮ってなかったんだ。その人の気持ちが滲んで、心にしみてくるからさ。」

板花さんはそういうと、パシヤと僕を撮った。きつと、こういうところなんだろう。いつも人の事を思っていて、未来を見ていて。綺麗事と分かっているながら、綺麗事を本物にしてしまう。僕にはなかった力。でも、この人を見ていると、僕にもできるような気がする。それぐらい、花火よりも、この人の心は、

「綺麗だ、すごい。」

「うん。綺麗。…ねえ、私、」

パシヤ。僕にもできるような気がしたから。悲しみを救う写真じゃなく、心から幸せだと感じられるような写真を撮るような気がしたから。その顔が、

「しあわせ」と笑った瞬間、シヤツタを切った。

もうすぐ、学級文化祭が始まる。ここに来る人は、忘れられない幸せを味わって、明るい気持ちで帰っていくだろう。きつと僕たちには、それができるから。

今、僕の瞳に映っているものは、まわりの人の幸福があふれた、幸せな未来だ。そしていつか、僕はその景色を、カメラに収めることだろう。